

# 特集展示 地図を楽しむ

令和5年(2023)3月4日(土)～5月28日(日)

地図は古くから、それぞれの目的に応じて、数多くの種類や形態のものが作成されてきました。それらは当時の地形、町並み、事件の様子、地理概念など、多くの情報を視覚的に伝えてくれます。

今回の展示では、合戦史や築城技術を学ぶための地図、古城跡を記録するための地図、桃山から江戸時代初期に広まった日本地図など、さまざまなものを紹介します。これらが作成された目的や時代背景をさぐることを通じて、地図が伝える情報の豊富さ、見る楽しさを再認識していただければ幸いです。

※展示資料は特記なき限り秀吉清正記念館蔵。

## 1. 軍学の地図

軍学とは、戦争での用兵(軍の動かし方)や戦術を研究する学問である。中世以前は、古代中国の兵法書『孫子』などの影響が強かった。仏教や陰陽道と強く結びついて、国家を守る大きな道筋を示すという性格が強かった。

戦国から江戸時代初期にかけて、日本の軍学は独自の発展を遂げていった。戦国の名将である武田信玄や上杉謙信などの合戦史が学ばれ、内容も軍令(軍中で兵士が守る規律)や戦術など、実践的な面が重視されるようになった。上杉謙信に発する越後流、武田信玄に発する甲州流など、多くの流派が誕生し、それぞれで独自の軍学書が編集された。

その中でも甲州流は徳川将軍家が採用したため、影響力が大きかった。武略・知略・計策の3つが柱とされた。武略は城取(築城法)・陣取(敵と対峙して陣を確保すること)・備立(各陣に兵を配置すること)の3つが基本とされた。合戦史や築城技術を学ぶために、多くの地図が作成された。

### 1 『本邦武家沿革図考』 ほんぽうぶ けんかくず こう てんしょう10 ねんへいし ぜんせいず 天正十年平氏全盛図

江戸時代後期 文化12年(1815)刊

檜山坦齋編

### 2 『主図合結記』 しゅず ぐわいけつぎ よしだじょうず 吉田城図

江戸時代後期写 明和初年(1764)ごろ成立

山県大弐編

### 3 四戦場之図屏風 し せんじょうのずびょうぶ させき 左隻(模写)

原資料:江戸時代中期 元禄13年(1700)

有沢永貞筆 成巽閣蔵(石川県金沢市)

### 4 朝鮮国内裏并陣場之図 ちょうせんこくだいりならびにじんばのず

江戸時代前期 高木貞友写か

### 5 縄張図(蝮亀利縄図) なわばりず ちきりなわす

原本:江戸時代前期 寛文9年(1669)11月

17日成立 佐久間景忠編

### 6 陣立図 じんだてず

江戸時代後期写

## 2. 尾張徳川家の城郭調査図

鎌倉時代から安土桃山時代にかけて、尾張地方には450か所以上の城館が築かれたことがわかっている。それらには天守はなく、石垣も存在しないのが普通であった。

慶長20年(1615)に徳川2代将軍・秀忠から、「元和の一国一城令」が出された。これは諸大名に対し、原則として一国(藩)に居城1か所を残して、その他の城はすべて破却するように命じたものであった。これによって尾張に残された城郭は、名古屋城と犬山城だけとなった。

一方で尾張徳川家は、有事の際にはこれらの城跡を、軍事拠点として再利用する計画を持っていた。そのために少なくとも2回、城跡の詳細な調査を行っている。17世紀中ごろの調査ではNo.7、8のような大型の絵図が作成され、18世紀の調査ではNo.9、10のような比較的小型の絵図が作成されたと推察される。それぞれ18枚ずつの絵図が、名古屋市蓬左文庫に現存している。

### 7 愛知郡末森村古城絵図 あいち ぐんすえもりむら こじょうえず

江戸時代前期 名古屋市蓬左文庫蔵

※3/4～4/16展示

### 8 愛知郡岩崎村古城絵図 あいち ぐんいわさきむら こじょうえず

江戸時代前期 名古屋市蓬左文庫蔵

※4/18～5/28展示

### 9 春日井郡小牧村古城之図 かすが いぐんこまきむら こじょうのず

江戸時代中期 名古屋市蓬左文庫蔵

※3/4～4/16展示

## 10 春日井郡清須古城之図

江戸時代中期 名古屋市蓬左文庫蔵

※4/18～5/28展示

### 3. 桃山・江戸時代前期の日本地図の普及

日本地図で最古の年紀が記されているのは、延暦24年(805)の「輿地図」(京都・下鴨神社蔵)であるが、これは江戸時代中期に写されたものである。原本が残るものとしては、嘉元3年(1305)の「日本図」(京都・仁和寺蔵)が最古である。これら室町時代以前の日本地図は、すべて「行基図」と呼ばれる形式のものであった。

この名称は、奈良時代の僧行基(668～749)が原図を作成したと伝わることによるが、確かなことはわからない。行基図の特徴は、諸国が俵を並べたような形で連なり、海岸線は丸みを帯びた曲線で表現されることにある。

これら行基図は、手書きのものばかりであった。それが初めて印刷刊行されたのが、慶長年間(1596～1615)ごろの改訂で、No.11『拾芥抄』に追加された日本図であった。江戸時代に入ると出版活動がさかんになり、大量の地図が刊行されるようになった。No.14は当時のベストセラーとなった日本地図であるが、列島の形は行基図をもとにしていた。

#### 11 『拾芥抄』 日本図

①桃山～江戸時代前期 慶長年間(1596～1615)刊

②江戸時代前期 明暦2年(1656)刊  
洞院公賢編か 名古屋市蓬左文庫蔵

#### 12 大鏡背面日本図(拓本)

鏡：桃山時代 慶長年間(1596～1615)ごろ  
初代木瀬浄阿弥作

#### 13 テイセラ 日本図

桃山時代 1595年(文禄4)刊 L. テイセラ作  
銅版刷に手彩色

#### 14 日本海山潮陸図(パネル展示)

原資料：江戸時代前期 元禄4年(1691)  
石川流宣画 木版多色刷 名古屋市博物館蔵

### 4. 中村と名古屋の地図

尾張藩が全域の村々に命じて、村絵図を提出させたのは天保12年(1841)である。この時に作成され、藩に提出された地図は、尾張のほぼすべての村の分

が、徳川林政史研究所に現存している。No.15は地元に残された控え図である。

明治に入ると印刷技術が発展し、交通機関の発達などによって必要性が高まり、数多くの地図が印刷刊行されるようになった。さまざまな範囲を取録した地図を、だれもが入手し、利用できるようになった。

当館の近辺は、明治23年(1890)に上中村、下中村、稲葉地村が合併して、織豊村となった。そして明治39年(1906)に鷹場村、日比津村と合併し、愛知郡中村となった。名古屋市と合併し、西区(当時)の一部となったのが大正10年(1921)、中村区が誕生したのが昭和12年(1937)である。

中村区域が現在と同じとなったのは、戦時下の昭和19年(1944)であった。防火、救助、防諜(スパイ活動の防止)などを強化するために、一般行政区域と警察管区を一致させることが目的であった。

#### 15 愛知郡上中村絵図

江戸時代後期 天保12年(1841)  
妙行寺蔵(名古屋市中村区)

#### 16 名古屋市実測図

明治43年(1910) 名古屋市教育会刊  
横地 清氏蔵

#### 17 名古屋市西区最新地図

昭和10年(1935) 名古屋西区役所刊  
横地 清氏蔵

#### 18 東宿土地区画整理組合図

昭和10年(1935)ごろ  
東宿土地区画整理組合発行 横地 清氏蔵

#### 19 名古屋

昭和13年(1938)～14年 名古屋市役所刊  
横地 清氏蔵

#### 20 中川運河案内

昭和12年(1937) 名古屋市刊 横地 清氏蔵